



世田谷文学館友の会

会報 第60号

2021年12月14日
世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南島山1-10-10
TEL 03-5374-9111
FAX 03-5374-9120
ホームページ
<https://setabuntomo.net/>

特別寄稿

「安西水丸さんのこと」

村上 春樹

僕が安西水丸さんの存在を初めて知ったのは、一九七〇年代の中頃、雑誌「宝島」に嵐山光三郎さんが中心になって連載していた「チューサン階級ノトモ」というページにおいてだった。当時は嵐山さんも水丸さんも（そして他の多くの執筆者たちも）まだ平凡社の社員で、いわばアルバイトみたいなかたちで、ペンネームを使って好き放題をしていた。水丸さんもそこで、渡辺昇という本名を捨てて（というか）、安西水丸というあたらしい人格（オルターエゴ）を獲得したわけだ。

当時僕は国分寺でジャズの店を経営していたのだが、この連載が大好きで、毎月楽しみに「宝島」を読んでいた。水丸さんはここで初めて漫画やイラストみたいなものを描き始めたようだが、その頃から既に個性あふれる画法を身につけており、そのどこことなくすつとぽけた、しかし洒脱な味わいが魅力的だった。そのときから「安西水丸」という名前は——とても覚えやすい味のある名前だ——僕の記憶の中にしっかりとインプットされていたわけだ。

僕は一九七九年に文芸誌の新人賞をとって、いちおう小説家みたいなものになったわけだが、それからほどなく水丸さんにお目にかか

ることになる。その頃は店も千駄ヶ谷に越していて、僕は店を経営しながら小説を書くという、一足のわらじを履く生活を送っていた。忙しくはあるが、まだ元気が余っている年代だった。水丸さんも絵を描きながら、平凡社の社員を続けていた（ほどなく退職願を提出し、平凡社は喜んでそれを受理することになるのだが）。僕は三十歳になったばかりで、水丸さんも三十代半ばという若さだった。

どういうきっかけで水丸さんと最初に出会ったのか、よく記憶していないのだが、僕の店のわりにすぐ近くに水丸さんの住まいがあり、そんなこんなで会って話をするようになったのかもしれない。やがて嵐山さんもうちの店にときどき現れるようになり、よくシェリー酒をがぶがぶ飲んで酔っ払っておられた。水丸さんと僕は気が合ったのか、よく会って話をするようになった。お酒もずいぶん飲んだ。そして僕が最初の短編集『中国行きのスロウ・ボート』を中央公論社から出すことになったとき、彼に装幀をお願いしたいと思った。でも当時は、水丸さんの名前はあまり世に知られておらず、出版社からは「それ、誰？」みたいな反応しか戻ってこなかった。でも「是非、この人に」と頼み込んで、水丸さんをお願いした。そしてその結果、できあがってきた絵は実に素晴らしいものだった（皿に盛られた洋梨）。それでも中央公論社の当時の担当編集者は、それが気に入らなくてボツにしようとしたのだが……この話は長くなる

ので割愛。

とにかく僕と水丸さんとの公私にわたる長年のおつきあいは、このようにして始まったわけだ。繰り返すようだけど、僕らはまだどちらも若くて、未来は手つかずで前方にひらけていた。もちろんお互い、まだ不安定な身の上ではあったけれど、「まあ、なんとかなさ」という樂觀的見通しの上に、基本的には愉しく気楽に日々を送っていたと思う。僕は順調にぼちぼちと本を出していたし、水丸さんも「へたうま画家」の筆頭株として世間の熱い注目を浴び始めていた。僕と水丸さんはチームを組んで、いろんな雑誌にイラスト付きエッセイの連載をやっていた。彼との共同作業はいつも楽しかった。今度はいったいどんな挿絵がついてくるのだろうと、毎号楽しみだった。彼の描く僕の似顔絵が、僕の顔の原型みたいになってしまった。

しかし思えば、水丸さんが僕の家遊びに来ることはほとんどなかった。というのは、うちにはだいたい猫が何匹かいたし、水丸さんは犬と猫が大の苦手だったからだ。でも一度、彼にうちのふすま絵を描いてもらうことになり、だからどうしても拙宅に来てもらわなくてはならないことになった。するとうちで飼っていたスリムな雌猫が、水丸さんに異様なほどの興味を持ち（女性に興味を持ったれるタイプなのかもしれない）、ずっと彼のあとをつけまわっていた。そんなわけで、水丸さんはすり寄ってくる猫に終始怯えながら、

震える手で数枚のふすま絵を仕上げるようになった。そのふすま絵は僕にとっての大事な思い出の品になっている。

水丸さんについては語るべき、興味深い出来事がいっぱいある。興味深すぎて、人には話しぶりこともいくらかある。でも彼が亡くなってからよく思い出すのは、二人がまだ年若く、いろんな「初めてのこと」を一緒に（あるいはそれぞれに）やり続けていた時代に起こった出来事だ。その頃、僕らはまだ他の人たちが手をつけていなかったいろんな事物、事象を取り上げ、僕らなりに好きに自由に料理していくことができた。そういう余地が僕らには与えられているようだった。それはおそらく幸運な成り行きだったのだろう。そして毎日が新しい手応えに満ちているように感じられたものだ。

もちろん水丸さんにとっては、亡くなるその日まで、毎日が新しい手応えに満ちていたのかもしれないけれど。

（作家）

わたしの一冊
『ナポリの物語』
著者 エレナ フェッランテ
訳者 飯田 亮介
早川書房
2017年7月10日刊行
秋元 摩那

である。イタリアでこの本の一部が映像化されてテレビで放映、現在五十か国で刊行、世界中でヒット

『ナポリの物語』は「リラとわたし」「新しい名字」

「逃れる者と留まる者」
「失われた女の子」の四巻から成る。著者の名前はペンネーム、一九四三年ナポリ生まれというだけで写真も本名も明かさ

れていない謎めいた女性

した作品になっている。

偶然、本の一部を原語で読んで映像を見る機会にも恵まれ、興味を惹かれて訳本を読み始めるとすっかり魅了され長編を一気に読了。

ナポリで生まれた同い年のリラとエレナの六十年近くに渡る友情の物語。ナポリ、フィレンツェ、トリノが舞台となり、それぞれの家族、友人たちが織り成す壮大な物語はとにかく登場人物の多さが圧巻である。一巻では複雑な人間関係に名前を覚えるのに苦労するが、次々起こるストーリーの展開に二巻、三巻と読み進み終巻までたどり着いてしまう。

著者は私より年配であるがほぼ同時代を生きしており、物語も六十年代から現在までのイタリアの社会、政治状況を織り込みながら進められていくのが興味深い。

イタリアに関心のない方でも、個性豊かな人生の描き方に共感し、一巻で止めようと思いついたが最後まで行ってしまったという方が多いと聞く。

また、イタリア、モンターネ村在住の飯田亮介氏の訳も素晴らしい。

（友の会会員）

わたしの一冊
『飯田深雪の洋風おかず』
—基本と応用—
著者 飯田 深雪
主婦の友社
昭和44年2月刊行
森 ゆり子

今はいしと日焼けした傷みがそこかしこに見られる一冊の赤い表紙の料理本。この本は半世紀近く前の私の兄の女友だちから当時一人暮らしだった兄へ、そして後に私へと譲られたものです。

表題は素っ気ない題ですが、中身は西洋料理を網羅したとても深く深い料理本です。私はこの本にずっと今日まで導かれてきました。

例えば、「チキンソテー・マチャンド風」は「アスパラガスのクリームスープ」と共に子どもたちが大きくなるまでの我が家のクリスマスマスの定番だったこと。また、外国の客人を家に初めて迎えた折、若かったその頃に厚手の寸胴鍋に大枚を払い、自身でブーケガルニを作りガラダシスープをとり、二日ばかりで「クラシックビーフシチュー」を作ったこと。そしてつい最近も作った「カスタードプリン」は、四十年前の頃から折につけ、子どもたちのおやつ、客人のデザート、近所の方への返礼などに大活躍。今もその通りのレシピで美味しさに変わっていないことに驚嘆！そのほかグラタン、ミートローフ、ミートソースなどもこのレシピを基本に少しアレンジして日常の食卓の定番に。等々、挙げれば切りがありません。

料理とその折の家庭の風景が共に思い出され私にとっての我が家の歴史といってもよいでしょう。どんな書物よりもこの本は私の生活の指針となっていてつながっていることに深い感慨を覚えます。

著者の飯田深雪さんの生活に対する心構えが、料理そのものに表われ、今はもうこのようなタイプの料理家は現れようもないとさえ思います。

そしてまたこの本は、今はすでに鬼籍に入った兄とその友人を偲ぶ思い出のよすがとなっています。

（友の会会員）



フィンランドにも「砧」？ 稲垣 美晴

私が世田谷区砧に引っ越してきたのは二十六年前のこと。それまで都心に住んでいましたが、東海大学北欧文学科でフィンランド語を教えることになり、小田急線沿線で家を探したのです。

「砧」という地名は、なんとも文学的です。平安時代の和歌に詠まれていることばではありませんか。私はこの住所がとても気に入りました。

昔、学校で習ったのは、いったいどの和歌だったのでしょうか。こういう歌もあります。

恋ひつつや 妹が打つらむ からころも
砧の音の 空になるまで

(千載和歌集より)

「砧」とは、布をたたいて艶を出したり、柔らかくしたりするための木の道具です。砧を打つのは、季節と関係ない日常の営みのように思えますが、どの歌もたいてい秋に詠まれています。古くは、晩秋の夜長、冬支度のために女性が行う作業だったのでしょうか。

砧の音はもはや、どこからも聞こえてきませんが、フィンランドでは、今でも布をたたく音が聞こえてきます。フィンランドでたたいているのは、床に敷くマットです。

どこの家にも、幅一メートルほどの長いマットが、あちこちに敷いてあります。たいてい、その家のおばあさんか、お母さんが織ったものです。家族の古着を

ほどこいて細く切り、それをつなげて織っていきます。マットをよく見ると、子どもの時に着ていたワンピースやスカートの柄がわかります。マットには一家の思い出がぎっしり詰まっているのです。

国の三分の一が北極圏に位置するフィンランドの冬は、寒くて暗くて長いです。ほとんど家の中で過ごすので、落着いて織物を作る時間があります。私もヘルシンキ大学に留学していたころ、手織機を貸してくれる所で、毛糸のひざ掛けを織りました。

マットを作るのは冬ですが、洗うのは夏です。共同住宅にも、外にマットをかけてほこりをはたく場所があり、週末には、マットをパタパタとたく音が聞こえてきます。本格的に洗うときは、海や湖のほとりにあるマットの洗い場に持っていく、ブラシでこし洗って干します。

北欧の人たちは、日照時間の長い夏に一カ月前後の休みを取って、たっぷり太陽の光をあびます。羨ましいほど長い夏休みです。家じゅうのマット洗いという大がかりな洗濯は、夏にしかできない作業なのです。多くの人が環境問題を考え、真剣に取り組んでいる北欧では、洗濯についても見直しています。最近、海や湖の汚染が心配され、水辺の共同の洗い場は少なくなってきたそうです。

砧はアイロンの普及で廃れました。フィンランドの夏のマット洗いというお楽しみは、大型洗濯機に譲ることになるかもしれません。

(翻訳家)

執筆者紹介

東京芸術大学美術学部卒業。著書に、『留学体験記』『フィンランド語は猫の言葉』『訳書に『シベリウスの生涯』『木の音をきく』『天使に守られて』他多数。世田谷区在住。

ヨソの文学館・記念館

【調布市武者小路実篤記念館】

二〇二〇年一月に開催した新春散歩「オリンピックスタジアムへ続く道」では、最終地点の国立競技場前で身の丈以上もある五輪のシンボルに触れ、やがて来る世界の祭典に思いを馳せて、静かなる高揚感に浸った。その前年の秋、文学はスポーツと繋がるのかという漠然としたテーマを掲げ、応えてくれたのが鎌倉文学館の特別展「オリンピックと文学者」であった。先の東京大会（一九六四年）では三島由紀夫ら多くの著名な作家が取材観戦。さらに一九二六年のベルリン大会には、何と白樺派の重鎮、武者小路実篤が行っていた——愈々始まる。又五人並行、前畑幾分よし、ドイツのゲネンゲルと二抜き出る、実にいい勝負、前畑すこしづつよし、しかし極少しの差、心配。いい勝負、希望あり、遂にちよつとの差で勝つ。気を揉んだだけ皆喜ぶ(略)かくて今日の水泳は日本デーになった、天気も日本晴なり。「東京朝日新聞」昭和十一年八月十三日——。

実篤記念館を入ってすぐ左の壁二面に、書籍にも全ては記されていないという詳細な年譜がある。実篤が渡欧した時、三歳上の外交官の兄・公共はドイツ大使であった。生涯に一度だけだったこの欧米旅行で実篤は、人との出会いや世界の広さや違い、家族や友人について思いを深くした。「仙川の家」と呼んでいた旧実篤邸の書斎には大きな机とどっしりした椅子、机の上に絵筆や絵具が色紙の束とそのままだ。終生の友となった志賀直哉と穏やかに微笑み合う晩年の二人の写真は、文学が取り持つ力と尊さを教えてくれる。

所在地 東京都調布市若葉町一丁目八—三十
電話 〇三—三三三六—〇六四八

(友の会会員 幾田充代)

世田谷区民ではないけれど……

“青春ふたたび”

〜埼玉県より〜

尾高 慶子

おじいちゃんおとうまのついでにわが
おばあちゃんもまたあなたと逢いたい！

残暑お見舞い申し上げます。

山ガールだったあなたも、いまや山姥……、

世田谷文学館で「山へ！ to the mountains」展を

やっています。たまには上京してきませんか。

展覧会の後は、半世紀ぶりに美味しい菊酒でも飲みましょう！

大崎K輔

調布中学校で同じクラスだったK君から、こんな楽しい便りが届いたのは、平成二十九年の九月だった。

K君からのハガキを握りしめて、9月9日・重陽の節句の日に、私は京王線に乗って、芦花公園の駅に降りた。

改札口の向こうに、仙人のような髭をはやしたK君が立っていた。K君のうしろから「よッ！」とS君が飛び出してきた。

世田谷の文学館でハグをする

青春時代にはできなかったこと

この日の日記に、こう記した私は、小中高時代を調布で過ごし、大学生の時に、実家が東村山に移転した。そして結婚して埼玉県に住むようになったので、調布とは縁遠くなっていた。一時私は、同級会の「行方不明者リスト」に載っていたが、大学時代の友達に出したハガキから「身元がばれた？」とい

う次第……。

芦花公園の駅も街並みもすっかり変わってしまった。私はキヨロキヨロ大騒ぎしながら歩いた。「ここにウテナ化粧品ってあったの覚えてる？」「今老人ホームになってる」「ふーん、ウテナって、母が使ってた」

そんな話をしていると世田谷文学館の門が現れた。

「山へ！」の展覧会を充分堪能して、私たちは芦花公園にも足をのぼした。そして、美味しい菊酒で乾杯した。帰りの京王線の中で「私、世田谷文学館友の会にはいる」とK君にメールした。

（友の会会員）

◇ ◇ ◇

講座 高橋誠一郎氏「アニメ映画《風立ちぬ》で堀田善衛の長編小説『若き日の詩人たちの肖像』を読み解く」に参加して

片山 義彦

フル・タイムの仕事をやめて以来、人に依頼されたことは断らないようにしている。自分の矜持のよくなものだからこよくいいたいのだが、実際は社会から用なしになっていく、自己憐憫から出ているのかもしれない。よって、「アニメ映画《風立ちぬ》で堀田善衛の長編小説『若き日の詩人たちの肖像』を読み解く」という講座の感想文を依頼された時、簡単に受けてしまった。よく考えたら、今まで彼の作品は『インドで考えたこと』以外は読んだことがない。これはもう独断と偏見で書くしかない。

まず、最初の疑問は、本を読むのに「他の物差し」

をあてるかということ。これは学者の読み方で、市井のひとはそんな面倒くさいことはしない。物語は物語のまま楽しめばよい。普通の市民は読書以外にいろいろやることがある。

文学批評だけでなく、社会科学の本を読んでも、筆者がある結論を出すとき、意識的か無意識的かは別として、その結論に都合のいい事実を拾い集め加工する。私は社内文書しか書いたことがないが、こういうマインド・セットが不幸にも出来上がる。私の下衆の勘繰りも入っている。

ただ、仕事として本を読むとき、こうした微に入り細を穿つ読み方になるのではないか。普通に自分の感性だけで本を読む読書家にとって、思いがけないヒントになるということもあると思う。ひねくれた感想しか書けないが、こうした催しには自分に刺激を与えるためこれからも積極的に出るようにしたい。

また、どんな些細な行為であっても、必ず何らかの化学反応をもたらす。図書館に行つて、さつそく『若き日の詩人たちの肖像』を借りてきた。この講座に参加しなければ、自分では一生手に取らなかった本だと思う。

今、導入部分を読んでいる段階だが、時代が太平洋戦争に突入する前夜だ。私は今、日本の現代史に凝っている。ペダンティックな興味ではなく、もつと即物的なものだ。若いとき、初めてアメリカ本土に行ったとき、日本の首都高が玩具に見えてしまう差があるこんな国と戦争をしたのだと思った。やつと時間ができたので、日本の現代史を紐解いている。この小説も何かのヒントになればいいと思って読み進めるようにしたい。

（友の会会員）

講座 世界文学としての源氏物語

―それは、何を語るのか― (全二回)

「第一回 源氏物語と楊貴妃の物語 (長恨歌)」に参加して

井守 百合子

コロナ感染者数がやや減りつつある九月十日、上野英二先生の講座に出席しました。先生の講座は以前も大好評で、また、との要望多く、本来なら去年催すはずの企画がコロナで延期になってこの日になったのです。

そんなわけで、受講者を前に、にこやかな先生の最初の話題は、「人類は感染症と闘ってきました。源氏物語で、父の帝が容貌のすぐれた三歳の我が子光源氏を、高麗から来た人相見にみさせた折にも、宮中によび入れず、人相見の許につかわせてみさせた、とあるのも感染症予防ではないか、と考えられなくもありません」とのエピソードでした。

配られたテキストは、源氏物語最初の帖「桐壺」と「長恨歌」の抜粋です。

帝の桐壺更衣に対する愛情があまりに過ぎるのは、と人々が「楊貴妃のためしも引きいでつ」心配する場面を取り上げて、「もう冒頭早々に中国の楊貴妃登場。世界的な広がりの中で源氏物語は始まるのです」。

先生の説明は、大変明快にして、闊達。ある時は格調高く、ある時はくだけた口調で学説を展開していきます。

「遣唐使も廃止してのちの国風文化隆盛の中で、中国文化の長恨歌を充分に咀嚼してできた文学が源氏物語なのです。源氏物語は長恨歌との二重奏を楽

しむエレガントな文学です」とおっしゃりながら、「焼き直しでもあり、パクリですね」とにっこり。

「しかし、白楽天、何するものぞ、とオリジナリティをふんだんにこめて、ケンカを売ってるわけですよ」と、似ているようで長恨歌より深く優れている実例をテキストを読みながら、次々とあげられていきます。

源氏物語が長恨歌の影響を受けている、とは聞いていましたが、作者紫式部の、ここまで深い学識と情熱の賜物、とは知らなかったもので、先生のお話に感嘆し、引き込まれての二時間でした。

私は若いころから、まことに細々ながら源氏物語の原書講読に親しんでおり、今も、今回の講座の司会をなさった糸井久先生の調布での講読会に入れていただいています。これからも読み続けよう！と大いに力をいただいた機会となりました。(友の会会員)

「第二回 源氏物語と天女の物語 (羽衣説話)」に参加して

紫式部のほんとうの想い

新藤 雅章

今年、古稀を迎えた。生きてる時間も残り少ないと思うと、せめて小学校以来国語や日本史で書名を知っている『源氏物語』くらい読んでおこうと思いい立ち、現代語訳ではあるが、今年の春から読み始め、今二十一帖「少女」まで読み進んだ。

一読して率直に思ったことは、次から次に女性に言い寄る光源氏にやれやれまたか、よく飽きずにいろいろな女性に恋を仕掛けて、さらにこれは今なら

犯罪だろう、紫の上など幼女誘拐ではないか、光源氏は病気ではないかとさえ思った。和歌、漢詩、楽器の演奏など何をしていても拔群で、さらに衣装のセンスも追従を許さず、しかも何より血筋が超一流で、イケメン、女性が無関心であるはずがない。

しかし私が一番疑問に思ったのは千年もの間、男から見れば、この女性の敵のような男の物語を多くの女性を読み継ぎ、また与謝野晶子をはじめ、瀬戸内寂聴などそうそうたる女流作家が現代語に訳しているのはなぜなのか？ということであつた。

こんな疑問を持ちながら、上野英二教授の二回にわたる講座「世界文学としての源氏物語」を受けた。そもそも源氏物語を世界文学として観るとはどういうことなのかと思いつつ、それがあの玄宗皇帝と楊貴妃の長恨歌を下敷きにして成立した物語で、さらに長恨歌は、羽衣伝説、浦島太郎伝説からも影響を受けて成立したという、上野先生のご講義にまったく異なる源氏物語像を見た思いだった。

紫式部が生きていた平安時代は中国文化を十分に咀嚼して自分のものとした国風文化を築いた時代であり、なるほど『源氏物語』はそうした一つの成果であつたということが納得できた。

ところで、故桐壺帝の妃である藤壺女御と通じてさらに追いかける源氏に対して藤壺の源氏への返歌『ながき世のうらみを人に残しても かつは心をあたと知らなむ』に式部のいちばん言いたいことが隠されている、と上野先生。玄宗皇帝の都合で落命した楊貴妃、羽衣を返してほしくて男の妻になった天女、そして藤壺男の身勝手さへの女の抵抗と誇り、紫式部はこうした女性の生き様を書きたかったのではなからうか。(友の会会員)

文学散歩 文化人がこよなく愛した成城を歩く

大木 昭男

台風十六号接近のため、予定を一週間遅らせて十月八日（金）に実施された。参加者は総勢三十名で、二班（各十五名）に分かれて午後かなり日差しが強くなかで行われた。コースは成城学園前駅の北側一帯の地域（成城四〜七丁目）で、配布された詳細な資料を見ながら約二時間ほどリーダーの案内に従って散策した。

最初に民俗学者の柳田國男旧居を訪ねた。大書齋を備えた英国風の建物は「柳田國男館」（旧喜談書屋）として先祖の地、長野県飯田市に移築され、残された資料は成城大学に寄贈されたという。跡地には現在お孫さん一家が住み、画廊「緑蔭館ギャラリー」を兼ねている。

次に訪ねたのは、水上勉邸跡で、広い敷地の庭は旧平塚らいてう邸の裏庭に通じていたという。エピソードとして、戦争中に生き別れとなっていた息子と三十余年ぶりに再会した話が紹介された。息子さんは全く偶然にも同じ成城に在住していた窪島誠一郎という名の画廊主で、信州上田にある戦没画学生たちの遺作を集めた「無言館」の館主である。

今回訪ねた十軒ほどの文化人たちの旧宅は、殆どがマンションなどに建て替えられているが、成城の中でも特に閑静な地にある大江健三郎邸は、現在も居住されている。きれいに手入れされた生け垣、赤い瓦屋根に茶色く塗られたさりげない門扉は半開きになっていた。外からは庭などの様子はうかがい知れなかったが、氏の「静かな生活」にふさわしい造りの住まいに思われた。

大岡昇平の旧居の敷地は分割されて五軒の住宅となっていたが、日課として散歩した桜並木は健在。存命中に毎年正月に自分の邸で新年会を催しており、同じ成城に住んでいた水上勉や大江健三郎や、大岡と親交のあった埴谷雄高、中野孝次などと一緒に応接間で夫人の手料理とワインをふるまわれて文学論を交わしていたことを、窪島誠一郎が忘れ得ぬ思い出として記している。



大岡昇平邸跡にて



朗読風景（大岡昇平「成城だより〈花便り〉」より、堀伸雄氏朗読）

大岡邸跡の近くの小さな公園に今回の参加者全員が集まったところで、大岡昇平の「成城だより〈花便り〉」の一節（一九八〇年四月八日より）を、リーダーが朗読してくれた——「散歩、桜木満開なり。六丁目より南は花と共に緑色の葉を出す大島桜にて、この方は二、三日おくれなれば八分咲き。ボケ、ツバキ、レンギョウ、ヤマブキなど一度に花開きて、成城はいまが花のシーズンなり……」。

朗読のあと、一班と二班が別々に記念写真の撮影。これにて今回の散歩（全行程約4km）は無事終了。桜咲く春に訪れたならまた感激はひとしおであった

ろう。参加者からは野上弥生子や北原白秋などの旧居跡がある成城の南地区も、またの機会に是非という要望も出された。
（友の会会員）

*同一内容で十月二日（土）にも散歩を実施しました。



散歩ご参加者 十月二日（右側）、十月八日（左側）



鬼の居ぬ間に

奥野 理恵子

私の父は「一に仕事二も仕事、三、四はゴルフ、五にお酒」という人だった。一年三百六十五日、早起きをして朝風呂に入る。冬季は一時間もかけて沸かした風呂であっても数分で出てきて食卓につく。その時には好物のだし巻き卵と野菜料理が数種類揃っていなくてはならなかった。ビールの中瓶を「美味い！」と言って飲み上げる。朝湯朝酒である。その後の出勤準備は、ネクタイを締め背広を着せかけ靴下まではかせるのが母の日課だった。帰宅後も然り。何種類もの料理の他に追加の酒のつまみを作らせビールとウイスキーを飲み満腹満足して床に就く。父が寝入るまで母がマッサージをする日もあった。「なんて我儘な男！」という私に、母は「私は療養で八年間も休ませてもらったんだから」と言っていた。健康を取り戻し頗る元気な母であったが、この親夫婦の有りように私は常に首を傾げていたものだ。

これは五十年前のことである。その年の秋、父がアメリカへの視察旅行に参加することになった。絶好のチャンス！「鬼の居ぬ間の洗濯」とばかり、母と二人小旅行を思いついた。

十一月初め、富山に出て宇奈月から黒部溪谷を走るトロッコ列車に乗った。燃えるような紅葉に歓声をあげ釣鐘温泉駅で下車した。ひっそりした佇まいの中にある宿に投宿。夜が深まるにつれ冷え込んで

温泉で温まるしかないと丹前姿で露天温泉に向かった。脱衣所から外に出ても浴槽はない。川原を走り川底から湧く温泉を岩で囲った湯船に肩まで浸かる月の光も電灯もない薄暗がりの中、ぬるめの湯に身を沈めること暫し、周りの人影が見えてきた。

「あれっ」と声には出さず、母と眼を合わせる。

混浴！気がついていても直ぐに飛び出るわけにはいかない。男性がいなくなるまで入っていようという我慢も限界にきて、二人で脱衣所に駆け込んだ。部屋に戻り敷いてあった布団の上で転げまわりながら「ビツクリしたあゝ知らなかったあゝ」と笑いに笑った。「鬼の居ぬ間の洗濯」は混浴初体験の旅となった。

(友の会会員)



バラを描く

石原 佳代子

私は絵の教室に通っている。教室で描いた絵を、展示用のウインドーに並べることになって、題材にバラを描くことになった。

その日、画材として置かれたバラは、咲きっぷりが私好みではなかったせいか、あまり身が入らなかった。バラは好きだが、どんなバラでもよいというわけにはゆかない。

画家の中川一政が描くバラは、いつも特別に選ばれたバラだった。描きたいと思う姿であってこそ、感動が筆に伝わるのだ。

私は未熟者ゆえに、なおさら「筆を選ばず」というわけにゆかず、思い切って、高島屋のローズギヤラリーまで出かけた。娘が就職した年に、夫と私の結婚記念日の祝にと、ローズギヤラリーのバラの花束を贈ってくれたことがある。花の首にネームプレートを付けた、貴婦人のような色とりどりのバラだった。

久しぶりにローズギヤラリーをのぞいて、花の値段をたずねると、一本1800円。その下が1500円という。「芸術を生むには贅沢も必要なのです」と言った学生時代の師の言葉を思い出したが、長年培った主婦氣質が頭をもたげた。

「少し考えさせてください」

と店を出て、もう一軒の花屋をのぞいた。

「どのバラも一本600円です」

という。よいではないか。ふだんなら手を出さない600円も、1800円を聞いた後ではどうということもない。開きかけの赤いバラを一本かかえて帰った。あした明るい光の中で描こうと、咲きかけの花びらに、薄紙で頬かぶりをさせた。これ以上、開かないでと。

翌朝、バラと向き合い、見つめて、愛でて、自分の中に取り込む。そして、墨と顔彩で描いた。

この絵は、気持の高ぶりが出すぎている気がして、数日後にもう一度描いた。花びらに変化はなかった。教室で先生にみてもらうと、家で最初に描いたバラを推された。

私の意を汲んでか、花びらをほどこさじまいだったバラに、後ろめたさを覚えながら、ドライフラワーにするべく、リビングの壁にバラを吊るした。

(友の会会員)

菅野昭正氏著『永井荷風巡歴』を読む

鈴木 廣義

桜が満開の折、花見の散歩帰りに立ち寄った区立図書館の書架で出会った偶然に感謝しながら読んだ一冊『永井荷風巡歴』（岩波現代文庫、二〇〇九年）、著者は世田谷文学館前館長の菅野昭正氏。仏文学者で端正な風貌もさることながら氏との友の会での交流を通じて感じてきたものが後押ししてくれるような思いで手に取りました。

奇人変人と自他ともに評された荷風翁（一八七九～一九五九）の事柄は夙に関心を呼ぶ趣もあって、先生如何に料理してくださるか興味津々読ませていただき、仏文学者共通の何かでもあるのか肩の凝らない楽しい読後感がありました。

荷風といえば『日和下駄（二名 東京散策記）』（初山書店、大正四年）に著された江戸の名残を懐かしめる興趣に加え、『下谷叢話』（春陽堂、大正十五年）にみる江戸末・明治の漢詩人たちの評伝もまた詳しく知られるところで、古き良き時代の人でありましょう。（友の会会員）

《友の会入会のお願い》

友の会の事業に積極的にご参加いただき、会員同士、共に活動し学び、交流を深めていただきたいと願っております。どうぞご友人、知人の方々にもご入会のお声掛けをお願いいたします。

入会申込用紙「友の会へのお誘い」は、文学館ロビーにも配置してあります。また、ホームページ「世田谷文学館友の会」からも入会申込みが可能です。

～こういう催しがありました～（2021年7月～2021年10月）

月 日	講演・講座・散歩	講師・案内人
2021 年 7 月 7 日	講座 アニメ映画《風立ちぬ》で堀田善衛の長編小説『若き日の詩人たちの肖像』を読み解く	高橋 誠一郎氏 (元東海大学教授、比較文学者)
9 月 10 日 9 月 17 日	講座 世界文学としての源氏物語 —— それは、何を語るのか —— (全2回) ・ 第一回 源氏物語と楊貴妃の物語（長恨歌） ・ 第二回 源氏物語と天女の物語（羽衣説話）	上野 英二氏 (成城大学教授、東洋文庫研究員)
10 月 2 日 10 月 8 日	文学散歩 文化人がこよなく愛した成城を歩く ～柳田國男、平塚らいてう、水上勉、大江健三郎、大岡昇平、映画人一三船敏郎、黒澤明、稲垣浩、成瀬巳喜男ら～	友の会スタッフ

エッセー「わたしの一冊」の原稿募集中！

- ・タイトルに本の題名（著者名・出版社名・出版年も）明記
- ・あなたのお名前、連絡先を明記
- ・字数は六〇〇字以内（厳守）
- ・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- ・原稿はお返ししません
- ・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- ・原稿は友の会に郵送かFAXでお送りください

編集後記

愈々ウィズコロナではありますが、いつもの日常が少しずつ帰ってきました。本当に長いトンネルをくぐってきた感じがいたします。改めてこれからの日常をどのように過ごすかを問われているような気がします。友の会としても、これを機に今までの振り返り、皆さまのお声に耳を傾けて、なおいつそうこれからも充実した企画ができるよう取り組みたいと思います。

今号では、世田谷文学館企画展「イラストレーター 安西水丸展」（四月二十四日～九月二十日開催）に足を運ばれた村上春樹氏に、特別寄稿していただきました。お楽しみいただけました幸いです。

（森 ゆり子）